

詩

おさらぎ ふみの
大佛文乃

山口市
(1938～1995)



【著作】

詩集『紅皿』（昭和44・思潮社）
詩画集『おせん淵』（昭和59・サンブライト出版）
『大佛文乃全詩集』（平成17・東洋図書出版）ほか

おせん淵

雨の日が続くと
おせん淵の底から這い上がってくる声
「おせんやあい おせんやあい」
叫び声は霧深い谷をゆさぶり
目覚めさせる

狂ったおせんは晴れ着のまま
崖の上から身を投げる
どしや降りの雨の中を
ふわり舞う蝶
むらびとの胸の底で伝説はうずき
消すことはできない

帳蔵に閉じこめられた
村の遠い記憶
「百姓娘のおせんはせわしゅうて
牛飼いを忘れたといの
かつえた牛は綱を食い切り
崖からほろけたそいの
おせんはおぼれ死んだ牛に
奉公先を追い出されたといの」

あの時からだ おせんは狂った
錆びついた錠前は力チツと鳴っただけで
弱い陽ざしは村を素通りする

淵へ沈んだ牛の霊は
若い娘を呼んでいる
崖端へ身を乗り出すと
「おせんやあい おせんやあい」
どこからか迷い込んだ一羽の蝶は
霧の底へと吸いこまれる

足の悪い老婆は 終日
おせん淵のまわりを耕し 蕎麦を作る
霧が晴れると 崖っぶちは
白い蕎麦の花でいっぱいになる
おせんを祀った小さな塚も
白い花で埋まってしまう

『大佛文乃全詩集』（東洋図書出版）より

詩人大佛文乃は、山口県阿武郡阿東町地福の場（現・山口市阿東）の出身。県立山口中央高等学校在学中に詩作を始め、山口県庁に勤める傍ら、多くの詩を全国的な詩誌に発表した。あるときは憎み、あるときは母胎のように癒された母の故郷長谷を離れようとして果たせぬ多感な少女の心の葛藤を綴った処女詩集『紅皿』で、その独特な詩風が注目された。その後、きびしい長谷の風土や歴史に目を据え、薄幸に負けず、古い因習のなかで生き抜いた村の女たちへの鎮魂の思いを野の草花に託して作品化した詩集『冬の花わらび』、詩画集『おせん淵』などを発表した。それらの作品は、「独り語り芝居」などでも上演され、更には画家たちによつてその作品の題材にもなり、多くの読者の共感を得た。詩人丸山豊は、彼女を「影絵の国の詩人」と称し、その詩の世界を「しんそこ冷えているくせに、みぞおちのようにあたたかい。うす暗いくせに明るく澄んでいる」、「哀しくてうれしく、はかなくしてたたかであり、弱々しくて不退転の強さをもっている」と評している。一方、これらの作品は、都会に脱出した多くの近代人（故郷喪失者）の空虚さを衝く鋭い問題提起の詩でもあると言われる。日々、その言葉の領域を広げつつある現代詩壇にあっても、今なお「大佛文乃の詩の世界」が色褪せない理由であろう。

左眼涙腺悪性腫瘍という難病に倒れ、五十七歳でその短い生涯を閉じるまで、六冊の詩集、詩画集を遺した詩人は生前、自分の在所長谷の「墓守」になりたいと語ったという。

平成九年（一九九七）、生家跡地に、詩画集の共著者でもある日本画家鈴木靖将の書で「おせん淵」の詩碑が建立された。また、平成十七年（二〇〇五）には、その詩業をまとめた全詩集が刊行されている。

【関連情報】

黒木章「大佛文乃の詩について」
（『山口女子大学国文』第九号 昭和六十三年十二月）

（文・秋吉 康）

大佛文乃 年譜

（提供・秋吉 康）

昭和13（一九三八）年

昭和32（一九五七）年

昭和44（一九六九）年

昭和51（一九七六）年

昭和55（一九八〇）年

昭和56（一九八一）年

昭和59（一九八四）年

昭和60（一九八五）年

昭和61（一九八六）年

平成2（一九九〇）年

平成4（一九九二）年

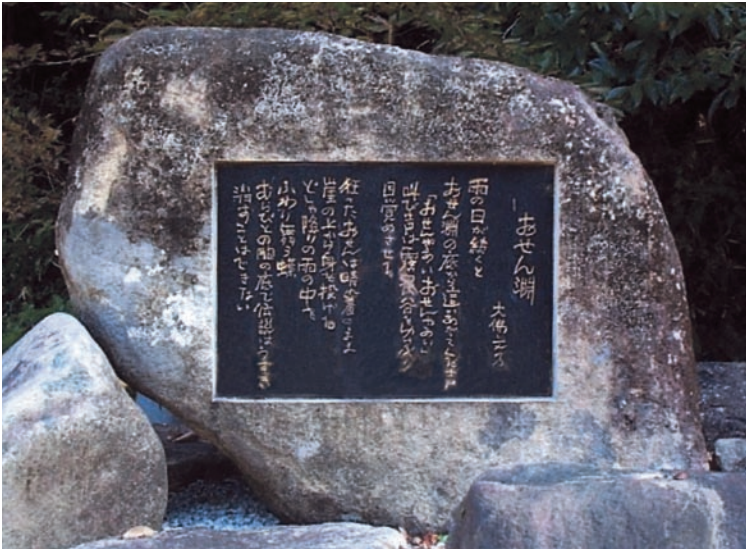
平成5（一九九三）年

平成7（一九九五）年

《没後》

一九歳	昭和32（一九五七）年
三一歳	昭和44（一九六九）年
三八歳	昭和51（一九七六）年
四二歳	昭和55（一九八〇）年
四三歳	昭和56（一九八一）年
四六歳	昭和59（一九八四）年
四七歳	昭和60（一九八五）年
四八歳	昭和61（一九八六）年
五二歳	平成2（一九九〇）年
五四歳	平成4（一九九二）年
五五歳	平成5（一九九三）年
五七歳	平成7（一九九五）年

7月29日、父多郎（三重県三重郡千種村潤田出身）、母タネコの長女として、山口市飯田町の医院にて生まれ、母親の郷里、阿東町地福の場（現・山口市阿東）にて育つ。地福小学校、中学校を卒業し、県立山口高校入学。山口高校分離改組により、県立山口中央高校を卒業。
高校在学中より詩作を始め、高校文芸誌『無蓋車』『樞野』に作品発表。
高校卒業後、山口県労働民生部職業安定課勤務。
雑誌『現代詩手帖』『詩学』などに作品を投稿。
詩集『紅皿』（思潮社）刊行。このころより詩人丸山豊に師事。
以後、文芸誌『広鉄詩人』『文芸山口』、詩誌『泥質』『路上』に詩作品発表。
詩集『片目の魚』（泥質社）刊行。
詩集『冬の花わらび』（サンブライト出版）刊行。
日本画家鈴木靖将が『冬の花わらび』の詩を基にした画展（京都）を開く。
山口県芸術文化振興奨励賞受賞。
この年以降、読売新聞、西日本新聞、中国新聞文化欄などに作品掲載。
鈴木靖将との共著詩画集『おせん淵』（サンブライト出版）刊行。
『おせん淵』詩画展が各地で開催される。（神戸、東京、大津、山口、久留米）
左眼涙腺悪性腫瘍発病。
詩集『梵天のをんな』（画・斎藤裕子）自家版刊行。
一人芝居「おせん淵」（千賀ゆう子）公演（京都、東京）
一人語り「大佛文乃を詩う」（三沢真理子）公演（山口市）
詩文集『さきょうの花』（冬耕発行所）刊行。
この年より、悪性腫体内の各処に転移し、入退院を繰り返す。
山口県商工労働部職業安定課退職。
「さきょうの花」とフラメンコギターの夕べ（山口市）
11月24日山口赤十字病院にて死去。享年57。
絵画展「大佛文乃を描く友人たち展」が開催される。（山口市）
生家跡（阿武郡阿東町地福の場）に「おせん淵」の詩碑建立（平成9年）。
『大佛文乃全詩集』（東洋図書出版）刊行（平成17年）。



「おせん淵」詩碑（山口市阿東生家跡）

